

「ムルデカ(1)」(2021年02月03日)

日本人はインドネシア語・マレー語のムルデカという言葉の名詞にしてしまったようだが、インドネシア語もマレーシア語も merdeka は形容詞だ。この一事にかぎらず、インドネシア語学習者が日本語を使ってインドネシア語を勉強しようとするとおかしなことになりかねないから、用心する必要がある。

日本人が意図している「独立」という政治的概念としての名詞はインドネシア語マレーシア語で kemerdekaan であって、merdeka ではない。merdeka が単独で使われる場合はたいてい、政治的概念の「独立」とは違う意味で使われることの方が多いように思われる。

KBBIはインドネシア語 merdeka をこう定義付けている。

1. bebas (dr perhambaan, penjajahan, dsb), berdiri sendiri
2. tidak terkena atau lepas dr tuntutan
3. tidak terikat, tidak bergantung kpd orang atau pihak tertentu, leluasa

インドネシア語シソーラスにはこう記されている。

1. bebas, lolos, berdiri sendiri, independen, langgas, mandiri, otonom
2. berlapang-lapang, leluasa, lepas, los(cak), sesuka hati

つまりこの言葉は「他者からの支配、拘束や束縛、あるいは負債や義理などから免れている自由な状態」「自立している状態」を意味しているようだ。

国家民族の独立性に関連して使われる場合、ムルデカの語は政治的意味合いにおける「独立」と同時に、異民族の支配からの解放と自由の奪取という二重の語感が重ね合わされていたのではないだろうか。独立維持闘争期に戦士たちが拳を振り上げて叫ぶ「ムルデカ」の合言葉の中には、自由と独立というふたつの観念がこのひとつの言葉の中に溶け合わされていたように思えてしかたない。

いや現在でさえ、政治的概念を持たせた merdeka の語が使われるとき、自由や解放のニュアンスがつきまってくるのは、KBBIが示している語義が反映されている証左に間違いあるまい。

この merdeka はサンスクリット語のマハルディカ maharddhika に由来しているというのが通説になっている。サンスクリット語のマハルディカは「豊かな、繁栄した、強力な」という意味だそう。

ところがなんとややこしいことに、サンスクリット語からそのままヌサンタラ住民が使うようになった他の語彙と異なり、この言葉は最初ポルトガル人がマルディカ mardica という言葉にして使い、それを引き継いだオランダ人がマーダイカー Mardijker という言葉に変え、それがヌサンタラ住民の間に浸透してムルデカ merdeka になったという複雑怪奇な歴史を持っているのである。

確かに、マハルディカの語義とKBBIに記された merdeka の語義を見ると、そのいったいどこに関連性があるのだろうかと首をかしげたくなる。それを見破られた方がいらっしゃるなら、ぜひご高説を拝聴したいものである。[続く]

「ムルデカ(2)」(2021年02月04日)

ポルトガル人が大航海時代の幕を開いてからついにアジアにまで進出して来たころ、ポルトガル人の奴隷にされて使われ、協力したアフリカやインドの原住民がいた。かれらはヨーロッパ人キリスト教徒から Moors (英語・オランダ語の発音はモーアズ、スペイン語・ポルトガル語はモールス、インドネシア語はモール)と呼ばれた。

このモールという言葉は最初、イベリア半島～北アフリカのマグレブ地方～シシリー島～マルタ島に定住していたムスリムを指していた。それが拡大されてムスリム一般の呼称となり、インドやセイロンや、はてはフィリピンに至るまでヨーロッパ人はムスリムをモールと呼んだ。だからときどきモール人という表現が出現するのだが、特定の人種・民族を指しているわけではない。フィリピン南部のイスラム社会でモロ Moro という名称が時折顔を覗かせることがあるのは、どうやらそれが、スペイン人がかれらをモールスと呼んだ名残であるらしい。

ポルトガル人がインドに進出して1510年にゴアを奪い取って以来、インドの拠点における諸活動にアフリカから奴隷が送り込まれてきたが、インドでも奴隷を入手して使った。奴隷にされたのは基本的に非キリスト教徒だったようで、つまりはモールが奴隷にされるのが普通だったのだろう。もちろん偶像崇拜教徒も奴隷にされているが、逆に偶像崇拜教徒もモールのカテゴリーに含まれてしまうことさえ起こった。

ポルトガル人はカトリック教の繁栄と隆盛を使命に担いで、暗黒の世界をカトリックの光で照らそうとアフリカ・アジアに向かったのだから、奴隷モールたちをカトリックに改宗・入信させることにも尽力した。カトリック教徒になれば奴隷身分から解放されるというシステムが行われて、解放奴隷はマルディカと呼ばれた。奴隷身分から解放されることを繁栄と呼ぶのは、気分的に何となくわかるような気がする。

1511年にマラッカを奪ったポルトガル人は、マラッカでの諸活動の下働きにインドからインド人奴隷とポルトガル文化をしみ込ませたインド人マルディカを送り込んだ。1641年にオランダVOCがポルトガルを打破してマラッカを陥落させると、1619年以来VOCのアジアにおける諸活動の中心地になっていたバタヴィアの都市建設と運営のための下働きとして、マラッカに住んでいたインド人奴隷とマルディカの子孫、およびポルトガル人とアジア人の混血子孫たちを奴隷としてバタヴィアに移住させた。

そのオランダ人の奴隷になったかれらに対して、オランダ人はポルトガル人が行ったのと同じことをした。プロテスタントに改宗・入信すれば、奴隷身分から解放するのである。オランダ人は解放奴隷をマーダイカーと呼んだ。

だから蘭領東インドにできたマーダイカー階層とは、ポルトガル文化とアジア文化の折衷物を生活の基盤に置き、宗教はプロテスタントだが社会生活における立居振舞はオランダ人の文明観からほど遠い野蛮人という烙印を捺された人々だったのである。礼節を弁えず、自由気ままにふるまう粗野で他人への気遣いを知らない野放図な人間という語感がマーダイカーの語に沁み込んで行ったことは大いに想像できる。

この辺りまで来ると、現代インドネシア語の merdeka の語義に近付いてくるようにわたしには思われるのだが、どうだろうか。他人に対して下手に出ないことは、独立独歩の人間が示す姿に似通っていると言えないこともあるまい。[続く]

「ムルデカ(終)」(2021年02月08日)

イベリア半島でレコンキスタが完成したあと、1492年にフェルディナンド二世とイザベラの宮廷はユダヤ教とイスラム教に対する禁教を宣した。その結果ユダヤ人やムスリムの間で、スペインに残りたい者はカトリック教に移り、自分の宗教文化を捨てられない者はスペインを去った。残った者たち、つまりスペインに住むためにカトリック教徒になった元異教徒に対して、モリスコの名前が与えられたのである。

しかしそれは、文化の一部としての宗教についてのものではしかなかったのだ。宗教は文化の一ファクターであり、あらゆる文化ファクターと同様に文明の産物だ。宗教が人間社会の根本に近い位置を占めるがために、宗教が文化の枝葉に大きい影響を与えてきたことは事実であり、社会生活のスタイルや色合いの概略の形を宗教が決める結果になったことも否めない。

しかしコミュニティにおけるライフスタイルの概略を形作った宗教の定める宗教行為が習慣化すると、人間は宗教のために宗教行為を行う意識よりも、身に着けた習慣に追われて宗教行為をするようになるらしい。ある日本人がインドネシア人ムスリムに「毎日5回の礼拝を行うのはたいへんじゃないの?」と尋ねたところ、「いやあ、それをしないと気持ちが悪いですよ。」という返事が返って来たという話がある。これが義務を怠ることで生じる罪悪感なのか、それとも習慣的行為をミスることによって起こる不快適感なのか、どうもそれが入り混じっているような気がしないでもない。

わたし個人の見聞でも、敬虔な大人のムスリムに「あなたがたムスリムはたいへんに信仰心の篤いひとびとですなあ。礼拝のたびに神と向き合っているのでしょうか。」と言ったところ、「いやあ、そんなひとは十人中でひとりかふたりですよ。大半は習慣として行っているだけです。」という返事をもらったことがある。習慣は神よりも強いことを、そのとき教えられた。

スペインに住みたいのならユダヤ教やイスラム教を捨ててカトリックに移れと強制され、それに従ったひとびとが自動的にユダヤやイスラムの文化を捨ててカトリック文化に移ったかと言うと、それは大いなる的外れだった。かれらは相変わらず従来のコミュニティに住み、従来からの服装・言語・宗教行為以外の社会習慣を続けた。キリスト教文化の洗礼名を与えられても、必要に応じて従来からのイスラム名に足したり外したりしていれば済む話だ。ともかく、習慣化

したライフスタイルを総入れ替えさせようとするなら、個人を孤(独)人にして異文化社会に投げ込むしかないのである。コミュニティが習慣という基軸に沿って自転する以上、コミュニティ全体を丸抱えて異文化に変えようとするのであれば、流血しかそれを実現させる方法はないようにわたしには思われる。

1508年、スペイン王宮はイスラム風の衣服着用を禁止した。1567年、再度イスラム風衣装を禁じ、同時にイスラム名、アラブ語の使用をも禁止した。ところが1607年になって、フェリペ三世はモリスコの国外追放を決めたのである。スペインから追い出されたモリスコの数はおよそ30万人と言われている。

百年以上前に、この土地に住みたければ改宗せよと言われて改宗したひとびとの子孫が、その土地で生まれその地の文化の中で育ったひとびとが、問答無用でその土地から追放されたのだ。スペインを去った後、かれらは自分たちを受け入れてくれた移住先の土地で、改宗した先祖と同じことをまた繰り返さなければならなくなった。

かれらの大部分はどうやらオスマン帝国の版図に向かったらしい。スペインから追放されたユダヤ人モリスコがオスマン帝国首都イスタンブールの外に小さいコミュニティを作り、イスタンブールのカリフにブレーンとして仕えたという話もある。カリフはかれらをたいへん重宝し、十分バランスの取れた待遇を与えたそうだ。ユダヤ対イスラムという色眼鏡でこれらの事実を見ていては、人間というものが見えて来ないだろう。

それは別問題として、モリスコがたどったその悲痛な運命の道程を念頭に置いて上のクロンチョンモリツコの歌詞を読むと、歌詞の意味が見えてくるのではないだろうか。[完]